白鳥博士が東京帝國大學の講壇に立たれるやうになつたのは、明治三十七年からのことである。この年文科大學の學科規定に大改正が行はれ、從來の九學科を新に哲・史・文の三學科にまとめ、史學科に國史學支那史學及び西洋史學の三專攻科目を置くことになつたのであるが、丁度この前年歐洲の留學から歸朝して、在來の學習院教授を奉職して居られた白鳥博士は、帝國大學教授を兼ねて、支那史學に屬する講義を始められることになつたのである。だからこの年史學科に入學した自分は、博士の大學に於ける最初の講義に出席する機會を得たのであつた。當時我が國に於ける支那以外の東洋史學の發達の有樣を追想すると、一般にはまだ幼稚な情態で、眞に深く研究の境地に突き進むで居つたとは認め難い時代であつたが、獨り博士の學問は此間に於て嶄然として群を拔き、匈奴の種族の研究、契丹女眞西夏文字考、烏孫に就いての考などが相ついで發表せられ、匈奴及び東胡民族考や烏孫考は獨文で歐洲學界に提示せられ、低調であつた我が東洋學界に於てよりも、却つて西儒の間に嘖々として名聲を傳へられたやうな有樣であつた。その博士が歸朝後間も無くして始めて大學の講壇に立たれることになつたのであるから、學生の期待は非常に大きく、獨り史學科に屬するものばかりでなく、哲學文學の徒も聲譽を聞き傳へて講席に集り、廣い何番かの教室も常に空席なく立つたまゝで聽講するものも少くなかつた。初めての講義題目は支那の北部に據つた民族の歷史と、歐人の著はした東洋史籍解題との二種類であつたが、史籍解題の方は別に時間を取つて講ぜられたことはなく、初めの講義中に於てこれに言及せられる程度に過ぎなかつた。その講義の中でかゝる題目を特に選定した理由を述べられたことがあるが、それによると、此等の民族は古來亞細亞の歷史を支配したもので、その研究は亞細亞史を知るのに極めて重要であるに拘はらず、我が國に於てはこれが閑却せられ、歐人の研鑽